



特別  
15  
1828  
2









丙子毫録(八)

春城生



書札の敵

回書の敵の種々様とありて、或は全部を滅し、或は  
 只題目と字一ありと書重のこのをセケヤクニテ  
 ことハ回書に對する冒瀆心あり、罪過に過ぎざる。其の  
 深遠の最ハ筆さのハ戦や革命或ハ忌諱の由り  
 己がハ幾萬の回書も未だハ紙火に附すことハ  
 あり、其ハ回書に對しての無理解カ、取扱を  
 粗略せん、蓋蓋の餅にさすことを厭み、或ハ兩  
 家ハ侵ヤルことを保衛することヲ勤む、或ハ  
 回書と用し、刷紙とハ、或ハ焚料ニ供する  
 其ハ其の程度ハ少々の罪過に過ぎず、或ハ  
 其ハ其の程度ハ少々の罪過に過ぎず、或ハ

凡そ回書に對する無理解カを恐るべきものなり、



彼等の眼より、~~何れも~~書いれよ。一概に無用の反故  
と見へて、父祖の執業に係りしもの父祖の愛蔵しれよ  
のち、そのが執業然書冊の体とす。てのち、直ちに  
反故と見做し、或は襷や屏風の下の張り、すこと  
が昔から、~~或は~~行ひてあるが、~~或は~~其の廢紙と  
いふ中、~~或は~~下ナ貴重のもの、~~或は~~潜人あり、~~或は~~無理解  
者、~~或は~~別々、~~或は~~其の書、~~或は~~反故中  
から發見し、~~或は~~此ともあり、~~或は~~湯盛を盛るもの、~~或は~~書、~~或は~~反  
故、~~或は~~衣から出れ、~~或は~~此ともあり、~~或は~~文翰志林の字本が、~~或は~~行  
の下の張りとす。とす。~~或は~~或る識者、~~或は~~助け、~~或は~~例もあり、  
余、~~或は~~改裝、~~或は~~す。方り、~~或は~~其の下の張り、~~或は~~多くの  
貴重、~~或は~~文書と發見、~~或は~~此例もあり、~~或は~~せにエエツ、~~或は~~本、~~或は~~  
表紙裏から、~~或は~~貴重の版本の、~~或は~~零紙と、~~或は~~覆、~~或は~~例、~~或は~~の、~~或は~~  
古い寺院や由緒ある、~~或は~~舊家、~~或は~~とす。一、~~或は~~片、~~或は~~古、~~或は~~空、~~或は~~多  
くの、~~或は~~稀、~~或は~~觀、~~或は~~の、~~或は~~マニエ、~~或は~~ス、~~或は~~ツ、~~或は~~ト、~~或は~~か、~~或は~~あ、~~或は~~ら、~~或は~~決、~~或は~~して、~~或は~~油、~~或は~~新



かきこまひいふかある。然るに無智無理解の故と以つて  
別紙にてん禁料とせんれいのかどれ不ぞあるか、折  
して失ふれどよく多の事を想ふと、又々其心を堪へ  
る。 ~~...~~ 故令いままの無理解、又由つて之を、又  
る幾度の甚しいいふと、又いふを、と云ふ。

以上の如き因考の無理解、~~...~~ 失はれ是職する  
して、自から因考の三交を花家を以つて任し、因考に相南  
の忍満を有しうし、思愛の足らぬ、~~...~~ 頻年感する  
べき、~~...~~ 行をるや、このか、~~...~~ 少くも、~~...~~ 昔し行いん  
●手鑑を作るおと、~~...~~ 折角一部、~~...~~ 経つて、~~...~~  
書元の写本も寸断して幾十百の帖、~~...~~ 貼付したる、~~...~~  
一部として賣らん、~~...~~ 截つて多く、~~...~~ 断片を、~~...~~ 方か儲  
かるとも、~~...~~ 符打算か、~~...~~ 出れ、~~...~~ びあるか、~~...~~ 実の、~~...~~ 惜しい  
ともしれ、~~...~~ である。ある人の名家、~~...~~ 自筆の文を集







示  
 書冊の厚味をのけるは或は入紙し或は裏打をするも  
 七事 陰外にあるが紙質を辨し難からむるを味  
 手にして察めし作しといふ。書本は初ん難いものも書体は脈  
 手の書名を志ぶるは流注の限りである。此等の日用書に  
 罪過は無くとも人の書に際限をいふも亦あるが自今の変更  
 制本は就し脚の書察を試みる。

書物に大切なる関係を有するもの判本を、判本のありまじり  
 古物の外題は呈天の如く、紙とせしむる書物を手の  
 快感と思ふこと、**難** 紙をすくはるゝ一は判本を保存することを  
 想ふと判本は、紙を拂ひぬらう。前々も云ふはこと  
 同考の神修、裏打をすること、此を得るは作合するあり  
 たいは、このこと、果のあり、と、紙質を後致し、紙質を  
 辨し、裏打を失ふ、やがの原形を傷害す、こと、  
 裏打を比つて、紙がまじり、優し、其の入紙の方







製本と

「道春の千澤本と云ふ所に値打があつたの事  
 証極と云ふ自署が刪えん持主が  
 青の雲名が刪えん影の無いか又人のいづく教  
 比ふ其書物 木切味此書名在  
 無記の事 是利字本をいふ者僧の書入と云ふ  
 之の事 之んを重んじてあるが彼等より新の理解か  
 らし 蝇若美と曰視し取つて危険のありから  
 注意を要す 七折かゝるぬ。

愛書家も程々の性癖がある。古本の標紙をいふ汚んや破  
 れといふと嫌つて、一刻も其儘の置き置かぬ直ぐ標紙を  
 取り換へたり。●●の汚んを裁ち切らぬ承知の出来ぬ  
 人がある。或は自分好みの標紙や題名箋と●●用いぬ  
 バ氣が通ぬぬ人がある。或る人の●●本の美観と敬す男  
 の本の輪廓外の餘地を全然断り去つて、之を帖と張







体裁の美化と原形保護との衝突する、こゝが  
 書物冒頭の跋路に於て危殆を憂は、假とどの本を以て  
 勿論体裁が教養あるもの、愛書家も多く、場合んま  
 紙をわけ、**假といふも一種の風味があ**  
**つて、原形のまゝに置くことも大切**、場合んま  
 るるまい。昔の書札の体、奉書を二ツ折つて書く  
 例がある。此二ツ折が原形であり、是が或る時代を法  
 のまゝであるの、或一半の白紙を用いて裁断す  
 ることがある。普通の半切と格好を同一にする、  
 ●裁断の念の動くより、原形の保護から入るといふ  
 心算は、**趣味のあるもの、性々**  
 古紙の裏を打つ、紙の用紙が麻紙である、**趣味**  
 を打つ必要も、**ウグ**麻紙の特徴を表裏に存す



所に風味ありん。美を没却して飲みまの。珠  
 危談るる製本師や表具職の注文の末端を断る切  
 ことありん。此の末端を継ぐことと最下の子がある。  
 美の寫經生の名をあらう。校閲者の名をあらう。こ  
 とある。華寫の年月を記入あることある。大日本  
 書種を記す。油を記す。其の華書が分明することある。  
 のん。之れを裁断すること。大切な文献を喪失する。七  
 のむ。其の過失は月讀以上である。書畫愛媛家  
 と此の過失を敢てする。このが少くある。

外四の七種を本師がアアウ貴重書を改裝して  
 比例に少くある。貴書家が知本師のやり直し  
 を善ること悪魔を善ることある。或る時代の有  
 名の詩人の詩を作つて、貴重書の断る層を集め、美  
 の此火して知本師を焚き、稿を七校満を改訂し得



五斗人れよすある。元由製本師の古本の汚穢を  
 厭ふて美を美化すること本職があるところ。金一  
 痛のよ見らるべき本能の汚穢を度々刀を揮ひ  
 する。汚穢をよみ特の條向か多く残つてゐるものがある。そ  
 る。斯う切つて取れ本文を侵さるゝ。深々刀を揮  
 切南有七。餘白が添まつて原形と全く異つた  
 ところ。か斯く製本師の美観は有る。か  
 書家から見ると鮮血淋漓の慘禍は、製本師に濫裁  
 家をいふ。諱名のあつても偶然か。彼等の刀ハ不  
 用の毛髪や爪を去る止まらぬ。性もいへば千足の  
 指とまじ及ぶから、濫裁の各の辭し難いのである。但  
 し製本師の固者も重の教養があるから、特  
 に工場の職工と之を望むもの、野暮の沙汰は、貴  
 重用者を、修補のせよ一日廿一夜の危殆  
 事すること、愛書家の裁票をよめること



て、是市書の修補を己と得ずとも、場合に自から信ずる  
製本師も是れ此修補とやらせし外なき。

吾書家の書書り美化を欲して、製本師の乗する所と  
り、原形と流すの過失、隔りの心算なきにあり、併  
し、吾書家の主張も一層道理がある。如何に書家の  
書いし餘り、体裁が真雑に、家人の濫用を取扱、交  
けり危険がある。如何にも家人が無用の反故と早合  
て、選流紙料を、並りあること、流合あること、此が、白合  
ハ、此道に、趣けるが、見まなく、い書物や文書、其の特  
る、不相慮の主張、箱を作つて、是れ、納め置、斯くす  
ルハ、無理解の家族と、粗略な、粗く、此、一法  
か、あつた。亦、前々云ふ如、書物の、原紙を、自家特定の  
標紙、交換、習癖のある人、注意す、元、の標紙を  
存し、又、上、自家特定の標紙を、装、  
標紙、あり。

11



重なるるけん外顔之美と共に反形を併せ保つの一法に  
 りと失はざる。この現に固有體ありて必く実行しとあり  
 方法である。亦見すべし。い書物を改装せしむるは主  
 文をわけりて箱に納めると同様、保護の一法であること  
 言ふまでもなる。篆刻家いふに山田宗室の家の製書帳を  
 嘗て見しとめりし。時々私の家も書帳の注文を取  
 りて来た。書物を渡すに日粗略々さへも危殆ありし如  
 くと可成り手帳日記<sup>（一）</sup>に比し、紙が虫食を食はせし見ると  
 寸法が違つて念の事と度々あつた。宗室もさうく皮肉  
 事ありし。どうも書物の方を断り切つても念の事とさ  
 りつゝ自らの絶倒<sup>（二）</sup>に

自今以前に裏打<sup>（三）</sup>非ざるを強請に比し、敢て絶對に非とせし  
 じらざる。随分物と由つて裏打をも念の事とせしむる事  
 との出来ざるの事と、蟲喰を憐るの故に、社業の事

12



いろいろの事ある。流石に前田家の如き大名家に修補の術は定  
 り精重なり。其の如き修補の術は、~~修補の術は~~修補の術は、~~修補の術は~~  
 其の名工を神といふ事あり。先づ古畫の損所を補修するに同  
 じ方法に、虫喰ひの箇所を丁寧と、保つて比、こゝの損を本所と  
 超越する。技術は、一つの虫喰ひを補つても、全幅の力を一龍  
 の比、一日の二程の途に達するものあり。相違するは、力  
 の修補の痕をえりと流石に、~~修補の術は~~修補の術は、~~修補の術は~~  
 程よく補つてある。如斯に一般の做らぬ程のことがある。其の  
 家には有る事あり。ある古畫を澤山と影字に比、~~修補の術は~~  
 其の影字に比、二三枚金澤の某寺に有る事あり。其の  
 のを一覽して其の丹粉を認めてあるもの。一教のを認めて  
 其の影字を認めてある。其の影字を認めてある。其の影字を認めてある。  
 此の畫の畫家の筆と、係りたる、各段又一々所を交へ、其  
 つし、字生、画生、後測者、筆の各が列記してある。其の筆生

13



実物

分のうまきとあはれ。又當の七前田家の陳列も、製本者の標  
 式が模造型で作ると、和書、漢書、和歌、等々類と分る  
 宛から~~製本~~を元つた~~標紙~~、~~題籤~~、綴じ  
 糸~~糸~~が~~製本~~に~~用~~を~~見~~られが、製本者之ん、則と  
 ころにあら見え。原形保過後に對して、とんけ注意を  
 拂かつた知ん多の、同書が就七卷下と長七箇と一  
 とくらべること、推測せん、及び多のことにあつた、松雲  
 居の流石、愛書~~書~~、王~~王~~もあつた、資料を  
 具備した人と思ふ。

洋風の製本が就七、別日陳列の機会もあつた、明治  
 未久少の進歩を又と居り、外四の製本者、比に  
 と何人ともの上、進歩があつた。雑誌の扱い、強ち  
 ハ生命を失ふやうな、不可減の書物の、製本が強ち  
 吟味を二重しうのか、永久性の、製本が、閉了



字書辞典目録 聖書等のバインディングの堅牢性を  
 要するに言ふまでもないが、日本製の本は巨冊が多  
 グラウとして開閉の際二三紙が飛び出したりして往々  
 醜態を現す。今が製本器械も優劣の異なる便  
 用とあるが、或は製本代の頭をハチン悉習がある  
 然らざらば、或は製本代の頭をハチン悉習がある  
 て、定地する當り職工の俗談の薄いの為め、今日尚  
 遠慮を感じることが頻りとある。梅雨期に入ると  
 標紙の~~目~~はげす失態もあるが、これを~~製本~~糊  
 を作るからむかぬ。西洋製本は梅雨期も  
 決して崩すことがない。いつをヤ獨りから假知の若を  
 取り替へても、更にも若干の製本代を添くも、本とい  
 と頼んぬことがあふか、出来て来たのを足ると、如何も  
 堅牢な主流は把握開閉に快感と見えれば、日本洋  
 式製本も、いまは改良を要する。紙がゆかぬが



164

十一

二

子と思ふが今(年)の  
業もといふ。







懐くことを感ずるの如く、今も亦早来(早来)讀人の見た例に依り  
 珠玉と連ねた文章を、每日の起居が書き記さん一日も  
 暇に所がまゝ、段々讀んで行くと、自分の事も二三所又  
 見へてゐる。乃ち八月廿五日に此の市崎氏新瀉(新瀉)に家  
 をも略血臥(早来)の報ありと記し、十月廿日(前巻)云  
 うと師(外史)市崎氏の門生書畫(書畫)及色紙(色紙)二枚を  
 あつきの春(早来)持来しと、早速押瀧(早来)と云ふと、その  
 氏(早来)の病を養ひて鑑(早来)名三(早来)在りと云ふ、則ち鑑(早来)に延  
 きて直ちに押瀧(早来)が極めて拙也とあるが、自分(早来)の  
 病の爲め山人(早来)と云ふことも少かつたが、自分(早来)の文海(早来)  
 あり記(早来)が甚だ少い。自分の病(早来)就(早来)山人(早来)が新  
 瀉(早来)死(早来)自分(早来)の病(早来)状(早来)の幸(早来)い(早来)保存(早来)して  
 るの如く、**日**取り出して見ると、如何なる長文(早来)の懇(早来)到(早来)の意  
 が悉(早来)かんとあつ、即ち左(早来)の録(早来)更(早来)全文(早来)を収(早来)める。



久しく音容に不接候へば不相愛り御元氣も共進  
 會津見物の事と存候先家本日の御方面も夢る  
 らしやと驚入申候別と私中の御不慮いふ候う  
 心細く在すやえと察し申候へ胸七のあやもやえ  
 覺え候此上の御異生所安に御座候要すらん平  
 生過飲の致す所すべく後未一層の御自愛  
 を祈り奉

唯今手元は何も無之候一も座衣と撥し何ぞ入御  
 覽可申一あり中の取纏ぬ差去し可申候定ま此  
 方七去る書より膳院炎の為に打纏ぬ候七十日間  
 休めり身動ささくろろろ割痛に悩とえ此四五日未  
 漸やく八や九に業持の事七相叶い候やうの始末も  
 来月半頃迄ハ列外に出候事不相叶時給ふも  
 少の懸賞候向有之候七内夏外患の苦云所と相



成難溢を極め居候

尊皇の御座七進の輕快の趣を承り候る安心は  
 候くも決して御油断のなきまじく輕快のみ事  
 あらざるやうに御座長が大事に御座る  
 枕上の御無聊中察し候候ことなき書記  
 したるは、此方と云候了共く坐り居候事  
 叶はざる候は、八日申候御狀披見  
 の際千景鏡花氏見舞い見え、御座致候事  
 是亦不料 驚き居候は、不慮なき事  
 とは、多し候と尊皇の此方のことき何人と云  
 敬馬場可致有向氏も暫く御目見掛り不申候  
 日氏無事には被居候や松智氏曰く去精被居候  
 新宮の難御非常の事と察し、お祭品中の御  
 以病御持御し一層の事と存候時候不候候一  
 御大切に被居候一日も早く中華力言候候



5

五

七奉叶侯宅待居侯草下松首

二十四日

春城先生 梧下

紅葉



此の手紙の日附ひ見ると、山人の癸信の日法を  
 録し比前日と見へる。尚ほ忘んとおれが自分の  
 共進合の開かん比のを見物の為めあつたか合ふ書信中にある  
 及び氏に改口丑峰 概留とあるハ 秋智修史の比共此山人列  
 懸の間柄也。細留に元と後差の社受びり改口新内新  
 少のまき帯心あつた。尚ほ手紙の終尾比中々年直下と有  
 るが、此の末原庄の軒付る者名と割りて店心よと連れ  
 直つて田飲の實である。尚ほ漏らす可き事ハ山人自身を  
 軒付る病氣氣の四推つておれことが、此状を、おれ又日法  
 比七續去してある。

山人が一年修けて日法を書いたを就て自人名の思ひ出と云  
 へば、山人の字で自分が二十七年七繼修し日法を認めしお  
 りことを知つて、或る時、おれハ、おれが自分も做ら  
 ないよ、おれと云ふれことかある。或る時、おれハ、おれ  
 不海の事を記すハ、おれハ、日法を記す要決







8

八

山人の日記の(一)篇を○有して居ると云ふは、其の寫し(二)が  
 けであつた。その中(三)の能向もあつたが、自分か山人と柳橋の并  
 田屋并(四)山谷のいる美(五)飲念(六)し(七)時の事(八)か(九)垂(十)し(十一)  
 書(十二)の(十三)ん(十四)の(十五)い(十六)の(十七)自(十八)令(十九)の(二十)一(二十一)教(二十二)を(二十三)喫(二十四)れ(二十五)か(二十六)令(二十七)と(二十八)事(二十九)と(三十)せ  
 合(三十一)の(三十二)細(三十三)心(三十四)の(三十五)あ(三十六)つ(三十七)た(三十八)の(三十九)一(四十)端(四十一)を(四十二)示(四十三)す。

丸  
書  
例



九 一字一花

香の物(細根、獨活、糸菜)

先頃、私は押入れを掃除して小さな軸を見出した。それは紅葉山人の日記帳らしい、紙三枚を縦に並べて表装したものだ。上の一枚には俳句、中の一枚には或る春の一日、友人と花を見ながら飲んだ日記の一節、下の一枚には、「紅葉」「十千萬堂」「風葉」「秋聲」「春

石」「桂舟」などの黒印をベタ／＼捺してある。俳句は左の如きものである。

田家

東山遊歩

花を見て立てば盃さされけり  
春の間にやう／＼逢ひぬ藤の花  
あすの用敷帳の傍まで呼ばれけり  
咲きおほせ咲かせおほせし牡丹かな  
見る花は過ぎぬ開かうぞほととぎす  
夕風や螢をふるふ川柳  
一口は夢のやうなる清水かな

又、日記の一節とおぼしきは左の如きものである。

四月二十一日市島春城坂口五峰三子と柳橋舟田屋に飲む

(料理は生稻)

時に墨堤の二重老いて雪の如く落つ

椀(大椀) 蕨。松露。ムシリ蝦。鳥の團子。

魚軒 鯛

小鮎の鹽焼。蒟醬。

天ぷら(重箱) 車蝦。鳥賊カキアゲ。

香の物(細根、獨活、糸菜)

妓 小萬。金八。

更に春城子と花を賞して山谷八百善に晩食す

味増吸(蕨)

鉢 赤貝。白和へ。木耳。モヤシ。根菜。ツマ萌し蓴。

魚軒 タヒラ貝の柱、鯛、鱒? 右三色(海雲。防風(モヤシ)ワサビ)

替椀 小鯛の大切。莢豌豆。口木ノ芽

口取 蒲餅三片。露甘露煮(長二寸) 車蝦(立二ツキリ)

四片 銀糸昆布

小鮎 魚田

香物 大根、瓜、西瓜(いづれも粕漬)

紅葉といふ人の老成ぶつた、丹念な性格や又その當時の文人生活の一面を知るのに面白い材料だと思つて敢へてこゝに録した。

いつか之れを石橋思案氏に示したところ、之れはほんものだ、面白いから僕の印も捺してあげようと、下一枚の諸氏の印の中へ「思案外史」一果を加へてくれた。



佐々木侍士が書きたる山人の日記のいふ如く、抄録したることあり  
 しか、自分山人のことを名づけて「逸業」に、佐々木とあらわし  
 書きいへども、長からずして刻意愛するが、唯此一事抄録し  
 たいことハ、露回の中尉が山人の書高を花の北時の日記のあ  
 るところの中尉と云ふいふ書高の砲兵中尉といふことと云ふ  
 文を、理解のあつたまゝ、又人が「山」と云ふ記が後述  
 露回日記の雑記に載せしめて、又澤文の自分の雑業山  
 と偽り記すを、秘教しと云ふは、此の訪問の九月十八  
 日かあると、山人の日記に左の如く書いてあり。

午前夏重と未就も、露回要塞砲兵中尉に  
 イソオキヲ氏切に面会と云ふ書と生ぐ、乃ち  
 午前(午後の誤り)二、三時頃未就の返電未故ん  
 午前二階の大掃除を作して、室を清うし、席に  
 緞身菊を挿し、葡萄菊を買ひ置くと、午後  
 瀬沼氏同道も未就、丑字位中、又子孫あり、



扇子一握外に、夕侍多振（天竺）（首飾入）（上）氷面鏡身  
を送りしに大満足（物）の

とあり、こゝに「氷面鏡」とあり、山人が三紙吳服庄の考あり、  
偏りに「日本室の足本帳」とあり、此帳が二階の書斎を特々  
掃除し、花を流し、待つに款待振の山人より破格の事  
ごあり、（書）露の土官公日本文書家の分書物を、居をて  
室の勢りいれと云ふ記文と、（書）春考考すこと、自分かと云ふ  
日本文人の不遇と一脈の哀れを、（書）得るの、（書）かゝる

八十八



丙子虎毛録(十)

反譯雜話

9

反譯ハ叛逆也ト西洋ハ言ふ所ニ偶然(一)羅旬語  
 の反譯ト叛逆の二語が音響が近いから、斯の誤  
 が生じられたが、事實多ク反譯の原作を、フケ毀  
 したるものから叛逆と云へ得ふ。是れ亦反譯ハ羅旬  
 のものも、日本語ハ西洋語と根柢が異つてあるから、反  
 譯ハ別ト困難である。日本ハ(一)の原作の一語一句を、  
 フケリ譯するの事直譯と云ひ、意を採つて譯す  
 ことを意譯と云ふ所也。直譯ハ譯者之故、受  
 けがよくなる。必竟語セ語法セ彼我ハ大ニ違  
 庭があるから、多ク意譯であるが、意譯と云ふ中  
 に創作の加味さんであるものも甚多ク、そして是



が成功してゐる。保一殿に云ふが、こんな反譯では、  
知んないが、日本に譯せば、わがと云ふこと、四と云ふ純正の  
反譯は、幾と云ふ有り得ないやうに思ふ。

所謂翻譯謂言譯者の内子に原文に由りて、思ひ切  
つて自分の心持で書く人もある。是れ明かに創作が加味  
せられてゐるが、其方がよいと主張する。其のもある。其の  
道徳の法を譯すといふのは、其方の属するかも知れない。  
日本の通譯用法は、日本の舞臺法をも加へて、自分の  
感得や思慕を書いてゐるから、設定原作を據つてあつても、  
道徳の創作といふ思ひが、實際に於て創作が加  
味せられてゐる反譯は、不可能のものかも知れない。  
明治の初頭に程々の反譯が、出たが、是れの厳正の反譯



作

人の勝るもの思惑を書いた人多い。是れ今日の文  
 字印つて後ある一程の興味をそゝると云いんのも、  
 拘泥せず自家の感興をまんまと託してある所、  
 創作家の特色、  
 字や語句も是れゆゑウケグウリイがあるけれども、  
 う。中村の如く、西國と云ふもの、  
 詩の如く、  
 則ち其の随所に閑白のつから、  
 及得る今、  
 及得る今、  
 及得る今、

誤

3

急ぐ急ぐのわい

昭和三年



この四の七五七七他四の七五七七は描し難いものある名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名

詩の  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名  
 詞を以て移し易いものも言ひ出りし味は本句は名











其

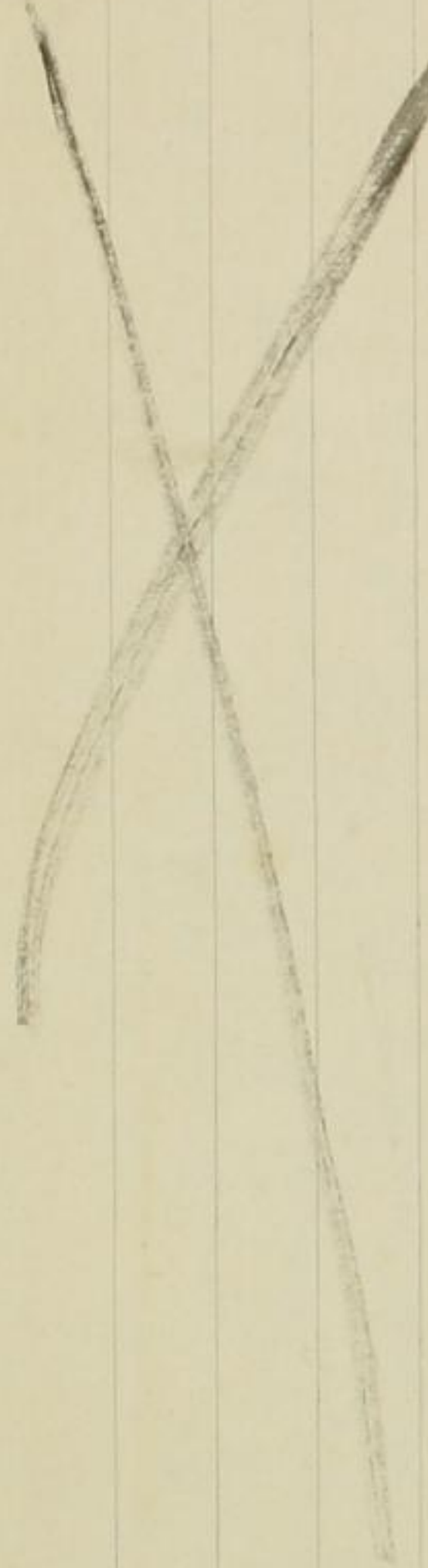
一目精

本書が讀めぬこと誰か否及譯を以て得ること考へることか才一  
 の潤達である。多くの譯者の原書を一冊や二冊讀んで譯して  
 あり書をつけ始めると、つづつ譯を執り始め、文藝の  
 譯もよく好譯の出来ぬもの。本書がよしく讀めると外四  
 譯も通して人々もよしく譯書の日長しうい。創心をもやちやう  
 文藝的の人の面創とい他人の地を割荒しと譯しよることと  
 好まぬい。この好譯の出来ぬ一原因である。忠實の及譯家  
 は原文の研究に時間がかかり一日一夜も譯し得ず一巻も  
 譯しよるも教命も要す人があつた。衣食生活の苦の及譯家  
 人の先も出来ぬことわらぬが生活の苦の及譯家の及譯家  
 業もよしくい出来るい。尚文上り。米、日本の及  
 譯家極めを低いから。出ころの及譯家。高知也。

6

對  
 及譯家批評家ありしこと也。一回也。





私をいり面倒なことが出来た。性分が自分から及澤し、  
 賤い笑いと無い。青年時代外宮の新聞を二、三  
 紙読んで、試みたこと、西洋のアナトミと澤  
 し、蟹の泡の書と取ったこと、記者時代の  
 ド、ハツクと、まゝ露西亞の説の英澤を口説いた  
 書かされたこと、外及澤を企てたこと、  
 いか、回顧的に及澤、内書思ひ出を、  
 の如きものがある。

左  
 讀んか



東洋雜記

富田房公全身東洋雜記書原小野梓氏が長書の刊行  
 を企てた時、吉田半峰氏がセボニア紀行中論を譯し  
 小野氏校閲し、此書が、其の堪能なる人なる、全部  
 自家流に直した。其の用後、獲諒詞も小野流に好譯と  
 するが、半峰氏の味い、こも披くも片影を留めず、出版さ  
 らぬのを惜んじ、一讀するも、小野梓譯とて、其が妥當に  
 思ふ如きところある。譯者、依つて、原書心、今も其の面目を  
 異しし。

沙翁のマリハを、林路外が、前以譯し、格内遊子、後、  
 譯した。試み、マリハ、夫人の、柄、譯の、趣、を、譯、み、ら  
 べ、又、つ、味、が、全、く、違、ふ、が、譯、者、の、斯、く、也、違、ふ



9

このかゝ一語を考へたことがある。譯り優劣の別として、  
 劇と通し舞台を解する道と否とを、  
 譯者にも斯く相違のあるのは偶然のものとも感ぜられた。  
 自公稱し、此時文を而三度人をし、英文は譯し  
 せんことがある。其譯文を讀んで、  
 今と曰し、考へて他人から聞かざるに感ぜられた。  
 多くクズグツクと氣かして堪らざる。必竟言葉の興  
 が斯くするの不思議なところ、原作と譯本との間に感ぜ  
 其他の隔りがあるの如く、又由つてくる。  
 殊沙大教中或る必要があり、口外事新多の切板  
 と和譯とをせんことがある。聯合軍の進退に關し、  
 記すべし、譯文のあり、聯合軍の文章が一そまゝの如く

相



おういと思つたが、譯者の「アライスの」語を解し得ぬか  
 ことが分つて一笑了したことがある。其雜誌の譯者の一  
 例として、インセント中世と *Innocent* と書いてある  
 の羅馬法皇と知らぬ、*メ*とクワスとマスの略字とする所  
 から、こんとクワイストと早合點して無邪氣なワリス  
 トと譯した笑話もあるが、斯の滑稽なる誤譯の法  
 則をいふ。

徳川朝の或る頃迄、キリシタ教が小説や書物に及ぶことも和譯す  
 ることを行はぬ。岡島冠山が其巨擘と云ふべし。上田秋成  
 の西月物語をも支那の小説の和譯といふべし。其  
 比較して見ると、秋成の文が遠く優つてゐる。こんと云  
 へば譯といふ、夫張り譯者の創作を加つて成功し



いふを見れば、さういふ。

上田敏は上乗の譯者と云ふたが、其の門人が**西田**  
 漢とあるらん及して、批洋家いどの譯を見て上田流  
 なるをみる。上田の譯日かういふと云ふ門人の賞物  
 して挙げた例を見ると、仰きえうと云ふやうな原語を  
 「かうこけ見んが」と譯し、初うあらぬ鳴けよ郎公  
 と書通譯生へきも、名乗りを上げよけよきと  
 するといふ、あうが、よく日本や言葉に應用してある  
 處に才の恐あうが、あういふと云ふ文法は日本化してある  
 のは、創作が加つてあると譯する、ことが本意をあらう  
 う。

と云ふ

本書に七のうくの種數が有り、外人が日本の事を書いたる、

11











十四

意譯も大かある。よの讀者の理解を待つる方便があるが、  
あつて其の選擇がうらうら六つ一〇〇〇、動も一〇〇〇と反  
逆とある。

何故面倒至極の及譯も敢てする。こと云ふと、譯者も  
いへばさうの心理がある。譯料を得ん考めの労役  
をいへば、論外か、若者又對して、宗教や私淑からやう  
七の中、若者書の内容が己人の境遇に似て居ると、  
描いて居る村並が己人の居村に似て居ると、小説  
中、主人公と同感のあつると、種々の心理の由り、  
あつたか、中、何人か譯し得ないものもあつて、  
功志からやうともあつて、文章や思惟や脚色さうの研究  
の爲り、苦痛を惜んか、刻苦する、よのあつたが、  
樂ん



てやるといふ教を~~て~~其の~~て~~斯の如き  
衣食等の譯科を眼中に措くことなるは、往々一冊  
の及ぼす教を是る事なるが、精譯好譯の往々  
此の範圍の生ずる。

夫と云ふ東京大學の漢文の先生とて中村教字の  
の持任と云持人、翁の云い、詩任とい、進釋  
すべきもの、新讀まきまの、英譯本、詩  
任と云、譯讀させ、翁の支那言の文を、  
二七一種の譯讀心、當時の感にも起る。

日本の和歌や俳句を英譯し、比例のいくらかあるが、洋  
人の和歌の概して成切、想ひ出する、南田竹冷が

15











廿六

振の會計から受取のものは酒資とて。えんごころを  
追憶すると真に懸汗を極むる。

142







No.

のがあら。こんどいり全くの贅句やおかしらと断  
 いらすとも、おかしらと二十七字が言ひ現れせばよ  
 いらぬある。●内容をも●説明するもいする語を  
 前置するもい拙の甚しいものと云い御んともい。僅  
 う十七字の内五字を無益に遣ふるも、愚の骨頂  
 ぶ、丁度おかし味ある語をもする前此段後を  
 する初心の誹謗者目と同一般である。●  
 孫まのいり語をもていり又うらうら説明しこれに  
 といふ

松屋



不合理の詩材

科学が進んてくると、詩といふも合理的なものでいく  
 のは自然の勢があるが、詩の材料に必ずしも科学  
 的である必要はない。むしろ思ふに、非科学的な  
 七詩的の詩人の採つてよめるものかいくともある。例  
 へば蚯蚓の声をいふとてあることや、腐肉の  
 かがりと化すことと考へ、いふとてあることや、  
 雀の海中に入つて泳ぐとてあることや、  
 日か七回巻くといふ人、  
 日かあるか、死か、月を聲あつとてあることと、  
 詩的であるか、  
 許さるべきかある。



終り  
白

餘白填詞

柳は静態に趣致あり、瓜は過へん更な  
と解めと瓜の柳より(千代)ハ瓜柳を描き得しゆを元々  
酷暑清涼を思ふ、山間の全水清冽消文するよ足る  
葦村に云く「夏川を越すうんたふ手は平後」千代ハ云  
「紅さいれ口も忘る、清水さうら」其れ此間の消息を  
俾ふ

海濱に波濤を觀るも夏時の一快、文朝の歌に大  
海の破々というに寄する浪わんて砕けて散りて散る  
か也、跌宕真に千古の絶唱。

胸中不平ある時揮毫に没頭すんば且く不平を  
忘る、梅道人不平あんな竹を寫す、其詩に云く  
「心中有箇不平時、畫亦奇縱横竹幾枝。」







を用ひ、或う人鶴年の二字を以つて宛つ、吾ん其の才  
を去るべし。

暹般日食皆既の時、欧西の天文家新日星を發見す  
ること二人あり、而して吾邦の理髮師を回發見と  
するものあり、痛快、由來邦人天体の趣味を有す  
此點又邦人の迷蒙と同一かきること、欧西の人  
~~渡来~~早く看破す、理髮師の發見較て異と  
す、是れ也。

都下の新少社の建築を見、余朝日社と第一に推す、  
輪奐の美ありが故に、屋上椽間鏡ありが故に  
あつた、屋の一端に傳書鳩のホムムあり、群鳩皆  
此飛翔を来一夙甲を為す、故り、是れ速報  
の看版也。

新少社  
はるかに  
いかに



